

住宅時事往來

外国人の居住問題を考える NO.4 1993/April

編集・発行: まち居住研究会(ジオ・プランニング内)
東京都千代田区飯田橋4-5-4, #201 〒102
tel. 03-3238-0574 fax. 03-3238-7878

editing & publication: The Community Living Research Group
c/o GEO planning, Inc.: 4-5-4, #201 Iidabashi
Chiyoda-ku, Tokyo 〒102

南米大陸への最初の日本移民が送り出された1899年から百年近くが経った。最後の移民船「にっぽん丸」が横浜港を出航したのは1973年のことである。かつて中国、インドと並びアジアの三大移民送出国であった日本は、北米、南米を中心に100万人以上の移民を送りだした。現在日系人の数は全体で200万人を越える予測されている。1990年代に入って、多くの日系人が今度は日本を目指してやって来るようになった。日系人の母国逆流現象である。現在、最大規模の日系社会を構成する日系ブラジル人130万人のうち推計で15万人にもよる人々が日本で生活している。

日系人は1990年6月の新入管法施行を契機に、南米各地から来日し日本で働くことができるようになった。外国人の単純労働は認めないとする国の方針と、深刻な労働力不足に直面していた産業界からの労働力需要圧との力関係の中で、不法就労者に代わる新たな労働力として日系人雇用への道が開かれたのである。

新入管法では、日系人2・3世およびその家族を3年の在留資格を持つ定住者として認

めている(日系1世は日本国籍を保有している)。定住者である以上就労制限はなく、もちろん単純労働も合法的に認められている。日系人の中には日本国籍保有者(ビザ不要)やまた家族として非日系の人達も来日しているため、いわゆる<日系人とその家族>として、どれくらいの人々が日本で生活しているのか正確に把握することは難しい。しかし外国人登録者数から日系人の動きを予測することが可能であろう。例えばブラジル人の外国人

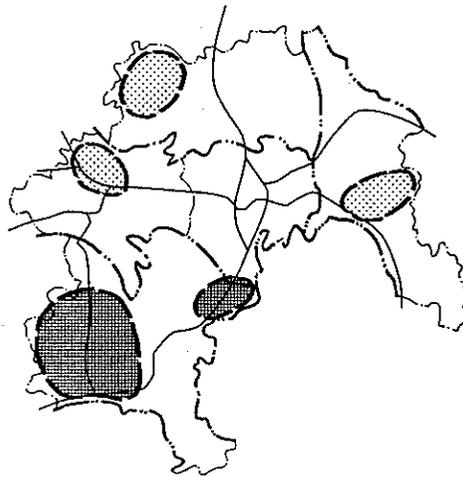
登録者数は、1989年から1991年にかけて1.5万人⇒5.6万人⇒11.9万人と2年間で8倍と激増している。次いで多いのはペルー人で、1989年の4千人から1991年2.6万人と6倍以上の伸びを示している(図1)。さて日系人の人たちは、日本のどの地域でどのような生活をしているのだろうか。ブラジル人の場合、13.9万人(1992年6月末現在)のうち実に45%に当たる6.2万人が愛知県、静岡県、神奈川県に居住しており、東海地方が圧倒的に多

いことがわかる。次いで多いのは埼玉県、群馬県など関東地方の各県である(図2)。さらに市町村別に見てみると、ブラジル人の場合、ある地方都市に突出的に集中するといった特徴が見られる。その理由としては、これら地方都市に立地する自動車産業等の関連工場が、製造ラインの労働者として多くの日系人を雇い入れているからである。

日系人が日本で就労する場合には訪日前に働く会社を決めてから来日する直接雇用か、訪日してから働く会社や職種を決めることになる請負会社(実態は人材派遣会社)か、どちらかを選ぶことになる。日本では、人材派遣に限られた専門職にしか

認められていないため、請負会社(本来は自社の設備と人材で仕事を一括して請負い企業に納品する)が工場内の製造ラインの一部を機械設備ごと借り受け、そこへ自社社員として労働者を送り込むという巧妙な方法で実質的な人材派遣を行っている。これを“構内請負”と称する。人材派遣の場合は、仕事内容や労働条件等が不明確なまま来日する上に、賃金は派遣会社を通じて支払われるため、不当な賃金ピンハネ等トラブルが発生しやすい。

日系人の住宅事情



ブラジル人の居住地は、地方都市に突然島状に出現する。一点集中型で面的な広がりは見られない。

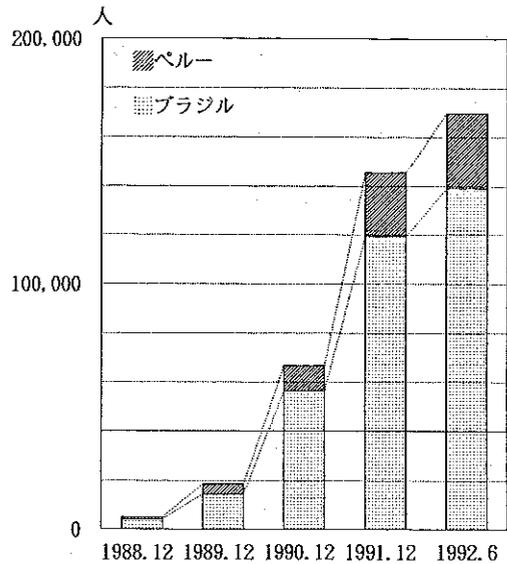


図1 ブラジル人・ペルー人の外国人登録者数の推移(全国)

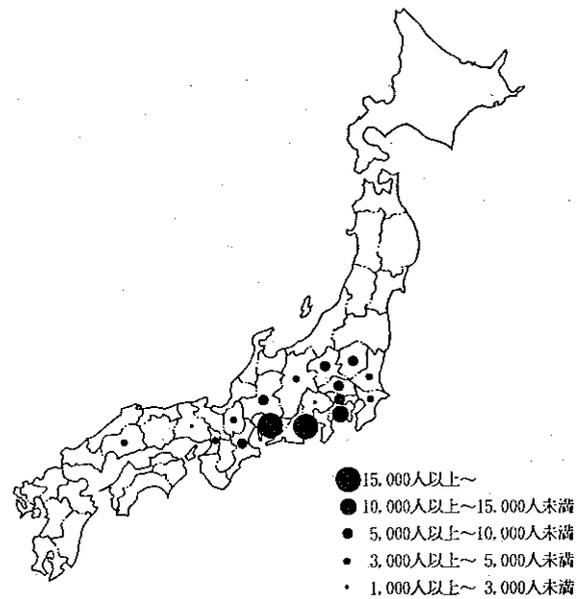


図2 都道府県別ブラジル人登録者数(1992年6月)

地方都市に出現する 日系コロニア

日系人が多く居住する地域では、ブラジル料理店や母国の食料品や雑誌を扱う店、テレビ番組を録画したレンタルビデオショップなどが出現し、母国での生活さながらとまでは言えないまでも、日本の地方都市の中に忽然と“ブラジル村”的な雰囲気生まれつつある。日系人の場合、ある場所に集まって居住するという特徴が際立っているが、それは何故だろうか。私たちが今回取材した群馬県大泉町のケースと日系人の生活実態に詳しい喜多川豊宇助教授(東洋大学社会学部)に伺ったお話を参考にすると、日系人の住まいは概ね次のように分類できる。

- ①日系人を直接雇用した企業が、自社でアパートを建設したり部屋を借上げた企業の寮・社宅
- ②人材派遣会社が借上げたアパート・住宅
- ③日系人が自分で見つけた借家

最も一般的なのは、雇用した企業や人材派遣会社が住宅を用意する①、②のケースで、これは雇用者側にとっても、管理のしやすさという点で望ましい。日系人といっても、日系1世以外は何とか話せる程度の日本語、3世や非日系の家族となると全く話せない人も多い。加えて彼らの母国語はポルトガル語かスペイン語、日本人とのコミュニケーションが難しい。企業によっては朝晩シャトルバスで住まいと工場を往復させるところもあるという。一方日系人やその家族にとっても、近隣に同国人が多いのは心強く、自分は日本語が出来なくても誰かに頼めば何とかするという安心感がある。日系人が集まれば、彼らをターゲットに商売も成立する。こうして日系

人の集住により一層彼らが暮らしやすい条件が整ってくる。職場でも地域でも日系人ばかりという環境にいるため、なかなか日本語を習得できず、それがまた地方都市における日系人社会の形成を促していくことになるのである。このような現象に対して喜多川助教授は「南米において形成された日系人コロニアを、そのまま日本に持ち込んでいると理解することもできる」と説明していた。

派遣会社の都合に 翻弄される住宅事情

自ら住宅を探す③のケースは別として、前掲①、②のケースでは、一見あらかじめ住宅が用意されているのだから、これといった問題はなさそうに思えるが実態はそうでもないのである。

企業の場合は地方都市ということもあり、自前で住宅を建設し用意する例も多い。単身者であれば2DKに2人同居など1戸に2~3人が同居、家族で来日している場合には家族単位で住宅が用意されるのが一般的。その際、設備など住宅の質がどうかは“企業の良心”に負うところが大きいだろう。しかし、人材派遣会社の場合は派遣というシステム自体に問題が潜んでいる。この場合、派遣会社が借り上げた住宅の中にあらかじめ冷蔵庫や洗濯機、ふとんなど日常生活に必要な家具が一応用意されている。家具付き住居費(水光熱費込み)一人△万円というシステムなので、会社にとっては、1戸にできるだけ多くの人数を住ませた方が得である。中には、夫婦や家族を他の人と一つ屋根の下に同居させる例もあり、プライバシーどころの話ではない。また、職場の変更や次々と来日する日系人の住宅確保の都合に合わせて、ほ

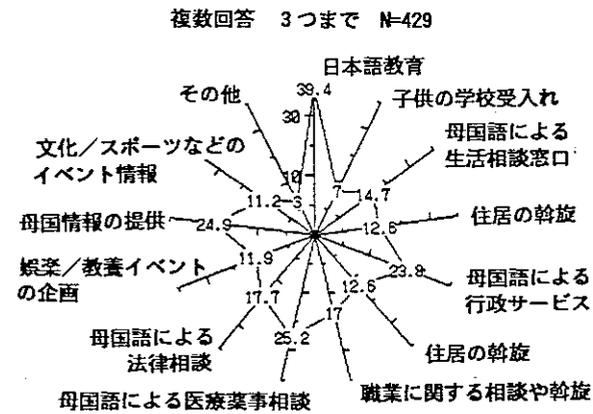


図3 日系人が望んでいる行政サービス
出典:「浜松市における外国人の生活実態・意識調査」喜多川豊宇

んの数カ月で転々と住宅を移されることも少なくない。家具付き1人△万円というシステムは、いつでも彼らを自由に動かすために最も効率的なシステムなのだ。しかし慣れない環境での長時間の労働を終えて帰宅する彼らにとっては、休養と憩いを与えてくれるはずの住まいが、いつ会社の都合で転居させられるかもわからず、生活面に加えて精神面でも不安定な状況を与える一要因となっている。日系人雇用について詳しいある経営者がいみじくも語ったように「派遣会社にとって日系人は商品、住宅は商品を入れるための倉庫」と言えるだろう。そこで日系人の中には、日本での生活に慣れるに従って自力で住宅を借りる人も出てくるが、この場合も日系人であるという理由で、なかなか住宅を貸してもらえないなど苦労は尽きない。

多様化する 日系人の来日事情

現在ブラジル社会は、激しいインフレと治安の悪化に見舞われ、また南米各国の政情不安も続いている。こうした社会背景の下に、日本での生活・労働を希望する日系人は増加してきている。既に3世が主流となりつつある南米の日系人社会では、それなりの社会的地位についた日系人も多く、生活の基盤も既に確立している。それにもかかわらず日本への逆流現象が起きているのである。母国では数人の従業員を抱える経営者自身が、日本へ出稼ぎに来ている例もある。私たちが今回大泉町の取材で出会った日系の人達も、母国では自営業や教師などの職業に就いており、聞けば羨ましくなるような住宅を残して来日していた。一方若い人々の中には、大学を休学し

て来日した人、外国あるいは母国へ行ってみたい、異文化体験をしてみたいという若い人ならではの好奇心から、かなり気軽に来日している人たちもいた。日系人が次々と来日する事情は、単なる「出稼ぎ」という理由だけでは語れないほど多岐にわたっていると言えるだろう。

長期化する 日本での生活

ところで、定住者という資格で生活する彼らであるが、実際のところ彼らは「定住」していくことになるのだろうか。母国に家族や年老いた両親を残して来ている人たちは、いずれは帰るという前提で働きに来ていると言う。母国のインフレでより価値の高まる“円”を元手に、帰国して商売などの事業資金に当てようという人、住宅を新築しようという人も多い。しかしながら比較的身軽な境遇の人々の場合には定住意向も強い。喜多川助教授が浜松市で行った調査(*1)によると、帰国するにしても帰国時期が不明確な人や、母国と日本の両方に生活基盤を置いて行き来したいという人も多く、在日期間が長期化する傾向や帰国しても再び来日するリピーター層など、はっきり定住とは言えないまでも、定住に近い滞在や生活像が浮かびあがってくる。日本としても日系人の定住を合法的に認めた以上、居住や教育、医療など基本的な受入れ体制について今後の対応が迫られることになりそうである。

一方、日系人と日本人住民の交流という意味ではどうであろうか。先に挙げた浜松市の調査によると、日系人は職業選択の場合でも「賃金や残業(多いほうが良い)」など労働条件の次に「温かい職場や地域社会」を挙げており、人間的な触れ合いを重視しているが、現実には「地域社会で日本人との間の人間関係の壁を感じる」人が47%という状態である。また日本人の側では「外国人就労者を市民の一員として受け入れる(60.4%)」としながらも、「外国人就労者との交流を望まない」という人が40%存在している。もちろん言葉の問題が両者の交流を妨げているという要因もあるが、「日本人が考える受入れ」と「日系人が望んでいる受入れ」の間には、「受入れ」に対する意識の違いが現れている。今後「受入れとは何か」私たちは、あらためて問われていくことになりそうである。

*1「浜松市における外国人の生活実態・意識調査」B5.3
喜多川豊宇 東洋大学社会学部紀要 第30-2号
参考資料/「シリーズ外国人労働者① 出稼ぎ日系外国人労働者」藤崎康夫著、明石書店

大泉町の日系ブラジル人

群馬県邑楽郡大泉町では多くの日系ブラジル人が中小工場で働いている。今号では、日系人受入れの先進地とも言えるこの大泉町の集中取材により、彼らの住まいや生活をサポートする「上毛地区雇用安定促進協議会」や町役場での取り組み、日系ブラジル人たちの住まいの様子を報告する。

大泉町は、隣接する太田市と並んで東毛地区の中核をなす緑豊かな工業都市である。この町では1989年頃から外国人登録者数が増え続け、1992年6月には2,448人と、総人口41,168人（日本人人口38,720人）の6.0%に達している。この大きな特徴は外国人登録者数の約6割がブラジル人だということで、1989年から1992年にかけては毎年実に300～500人ずつブラジル人が増加している。町中にはブラジルレストランやパブ、レンタルビデオ屋などが出現し、メインストリートを歩くと必ずといっていいほど自転車に乗ったり、ウインドウショッピングをしているブラジル人を見かける。なぜこの町にこんなにブラジル人が増えたのだろうか。

大泉町の産業基盤は、もともと第二次世界大戦中の中島飛行機小泉工場の開設に端を発している。終戦後、この小泉工場に米軍が進駐し、その後1959年返還された跡地に三洋電機東京製作所が誘致された。60年代の高度成長期には人口が急増し、工業団地の造成が開始されるなど、産業基盤の整備が進んでいった。現在三洋電機や富士重工といった大工場とその下請け等の中小企業が集積し、1990年3月現在の産業別就業人口では第二次産業が全体の2/3を占めるなど、現在まで「工業の町」としての顔を維持し続けている町である。

その一方で、近年では3Kなどと称され中小工場での労働力不足は深刻で、1989年頃は求人倍率が4倍を越えていたという。当初はオーバーステイのアジア人労働者が主に雇用されていたが、1990年6月新入管法施行により日系2、3世が職種を問わず合法的に就労できるよう

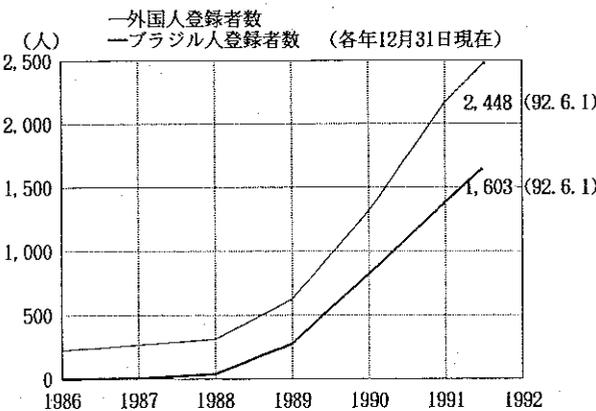


図1 大泉町の外国人登録者数の推移

になり、この動きに合わせて「東毛地区雇用安定促進協議会」が町内の企業を中心に1989年12月に設立され、日系人の安定雇用に向けての体制づくりが始められた。協議会では何度か南米視察も行い、受け入れる対象や体制を検討した。言葉の対応を考えるとスペイン語・ポルトガル語のどちらか一方だけの方がいいということもあって、日系ブラジル人に対象を絞って現地に雇用窓口を設置し、人材派遣業者を通さず直接雇用を行っている。

「安心して日本で生活してほしい…」協議会のきめ細かな対応

大泉町でも、協議会発足前は人材派遣業者を通して日系人を雇用するケースがほとんどで、現在でも協議会会員以外の企業では間接雇用が多いという。人材派遣の場合景気の動向に左右されやすく、仕事が減るとすぐに別の会社に移されることも多い。会社を変わるとそのたびに別の社宅に移らなければならず、他の家族との同居など不安定な生活を余儀なくされる。これを嫌って自分でアパートを探そうとする日系人も少なくないが、大家が外国人に貸したがらず不動産屋も紹介してくれない場合が多く、自力で探すのはかなり難しいという。

これに対して、協議会では日系人の労働条件や住宅、生活面まで具体的かつ細部にわたって定められた日系人受入れマニュアルを作成し、彼らの安定雇用に努めている。住まいについてみると、1Kは1～2人、3人なら2DKという広さの目安から生活必需品の準備まで、受入れに当たってのきめ細かい基準を設け対応している。



図2 ブラジルレストラン。レンタルビデオショップ、日本語教室も併設。

しかし、当初は試行錯誤の連続だった、と協議会会長の米澤勝美氏は回想する。「社宅にするため農家を改造して設備共用で1部屋に2人ずつ、15～16人は住めると考えたが完全に失敗した。まずシャワーが足りずあとから3つ追加したり汲み取り式トイレが問題になり水洗に直したり。共同炊飯も結局無理だった。次に町の中心にアパートを借りたがやはり家族でない者の共同生活は難しい。またアパートを借りる際に、外国人はだめとかいろいろ制約をつける大家もいた。そこで、1991年頃から協議会会員の企業に自分でアパートをつくれと指示することにした」現在協議会会員のアパートは10棟近くある。受入れに当たっては、チェックリストに従って冷蔵庫、テレビ、ふとんから鍋、茶碗まで、さらには到着した次の日の朝食も用意しておく。「本当に生活するということに配慮して、例えば一人で住むなら茶碗1個でいいというものではなく、友人が来た時のためにセットで用意するとか、鍋釜も1つではなく大・中・小用意するとか。日本に初めて来た人の身になってどうすればいいかという考え方でやっている」と米澤氏は言う。

福利厚生面でも、旅行やもちつき大会、ブラジル風パブの開設などアットホームなレジャーへの気配りから、1992年クリスマスにはブラジルの国民的歌手「イヴァン・リンス」を大泉町に招き、クリスマスプレゼントとしてブラジル人たちを無料招待するなど、まさに「遠くから来た人たちの身になって」が実践されている。

“定住”を考慮に入れた外国人受入れのモデルとして

大泉町では町長も協議会の相談役として加わり、日系人受入れを行政がバックアップする体制をとっている。外国人登録は住民登録と同じで、住民の権利である公共サービスを受けやすいように進んで配慮する姿勢で臨み、障害となる言葉の問題、情報不足などの解消に努めている。また日系人は家族を伴って来日することが多く、日系人の子供の教育の問題にも精力的に取り組んでいる。

町役場には現在日系ブラジル人2人が囑託として勤務し、彼らと行政サービスとの仲介役を果たしている。また広報のポルトガル語版を作ったり、日本語教室とポルトガル語教室を同時開催するなど、情報提供や交流の面で細やかな努力をしている。教育についても1990年から日本語学級が始められ、現在では町内の全小中学校（小学校4、中学校3）に日本語学級が設けられている。授業はポルトガル語の話せる助手1人と先生2人の体制で行われ、子供たちはレベルに合わせて週3～6時間の授業を受けている。子供の教育のことを考えて、わざわざ大泉町に来た日系ブラジル人家族も少なくないという。

大分類	品名	規格	数量	大分類	品名	規格	数量
寝具	敷布団		枚	食器用	丼		個
	掛布団		枚		皿	大	個
	敷布		枚		皿	中	個
	毛布		枚		皿	小	個
	枕		個		湯飲み茶碗		個
	2段ベッド		基		コーヒーカップ		個
	洋ダンス		基		水飲みコップ		個
	カラーボックス		個		ガラス杯(フック)		個
	食堂テーブル		基		調味料入れ		個
	椅子		脚		洗濯機		台
家具	座卓セット		セット	保健衛生	洗面器		個
	扇風機		台		洗い桶		個
	テレビ		台		石鹸入れ		個
	同軸ケーブル		本		腰掛け	取用	個
	テレビ台		個		股衣籠		個
	暖房具		台		足拭マット		枚
	流し台		台		ゴミバケツ	大	個
	コンロ台		台		ゴミバケツ	中	個
	ガスコンロ		台		ゴミバケツ	小	個
	電気釜		台		バケツ		個
トースター		台	たらい		個		
ポット		個	扉入れ		個		
冷蔵庫		台	箒		本		
やかん		個	塵取り		個		
鍋	大	個	干物掛		個		
鍋	中	個	カーテンレール		本		
鍋	小	個	カーテン		枚		
フライパン		個	タッセル掛		個		
まな板		枚	スリッパ		足		
包丁		丁	サンダル		足		
食器用具	お茶碗		個	通勤員	自転車		台
	お盆		個		自動車		台

表1 協議会で作っている受入れ準備表の項目一覧
家族構成・人数、社宅の位置などによって必要品目、個数を決める。1世帯の準備費用は30万円以上。

「日系人の日本滞在は長期化しよう」と大泉町役場で働く日系ブラジル人の橋爪美保さんは言う。「ブラジルは経済状況が非常に悪く、いくら日本が不況だといってもブラジルよりはいいので、職を失っても帰国する人は少なく別の職を探す。また、子供にずっと日本で教育を受けさせたいと考える親もいる」1990年11月に東洋大学社会学部助教授の喜多川豊宇氏が大泉町の日系人に行った面接調査では、回答者167人中約半数が「このまま日本に定住したい」と答えている。

1990年6月の新入管法施行後、すでに多数の日系人が日本を訪れている。彼らの中には、大泉町の日系人のように日本に定住したいと考えている人が少なくないであろう。「われわれの姿勢は、彼らに安心して長く勤めてもらいたい、そのためにできるだけのことをしようということ」と米澤氏は言う。協議会にはそのシステムを勉強したいという問い合わせが後を絶たないというが、「日本人が彼らを出稼ぎだと思って低く見るのはとんでもない。なぜ社宅や生活用品などそろえて、そこまでの経費をかけるのかと質問する人がいるが、まずこの姿勢が理解できない者には教えない」法的には認められながらも労働、住宅、教育など現実にはさまざまな問題がもたらがっている日系人の実情の中で、大泉町での協議会や行政の取り組みは、今後の日本での外国人居住受入れ体制の一つのモデルとして学ぶべきものが多い。

不動産屋は10軒以上まわり 日本人の同僚が保証人で 3ヵ月目にやっと見つかった

川村マリオさん

プロフィール：日系ブラジル人、パラナ州出身。1990年10月に妻と来日。8ヵ月後に長女と長男（17、16歳）が来日した。現在は冷蔵庫を造る工場勤務。妻はブラジル料理店で働き、子供達もアルバイトをしている。



鉄骨造2階建アパートの1階、2DK（6畳+6畳+DK）
バス・トイレ付、家賃53,000円、大泉町

—来日の目的と経緯を教えてください。
母国では、卸売業の営業の仕事をやっていた。家も持っており生活には困っていなかったが、インフレで貯金ができなかった。将来は子供達の家も建ててやりたいし、何か商売を始めたいと思っていたので、資金を貯めようと思っていた。ニュースで日本に行けば大金が稼げると聞いて、仕事場は決まっていなかったが、妻と2人で人材派遣の会社を通して来日した。

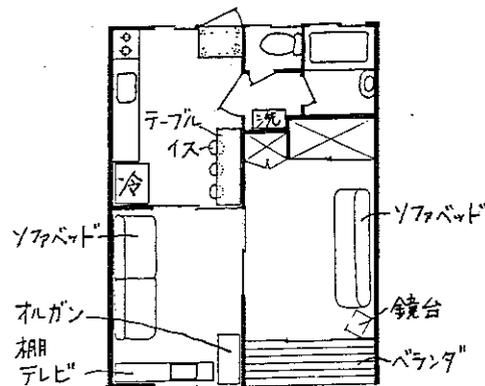
—日本での職歴、居住歴を聞かせてください。
人材派遣会社に紹介されて、最初は群馬県高崎市の鋳物工場に勤めた。その工場では自分たち8人は採用された初めての外国人だった。住宅は、人材派遣会社が用意、4畳半と3畳のDKのアパートで、夫婦2人で住んだ。家賃は1ヵ月1人1万4千円だったが、仕事の内容が危険で結局1週間で8人全員辞めてしまった。次に現在勤めている冷蔵庫製造の工場に移った。人材派遣会社が用意した伊勢崎市にある6畳2間+3畳の台所のアパートに、ペルー人とボリビア人と自分たちの計4人で同居した。TVと冷蔵庫と布団は付いてい

た。約3ヵ月いたが、同居人と国籍も違うので、会社に言って同じ間取りのアパートに越した。最初は夫婦2人で暮らせたが、同居人が次々と入れ替わったりしているうちに子供達が来日して一緒に住むことになった。しかし、1人1ヵ月1万4千円の家賃だったのが家族で住むことになると光熱費込みで9万円だと言われ、自分たちで家を探そうということになった。しかし、太田市も含めて不動産屋は10件以上まわり連絡先の電話番号を置いてきたり、貼り紙を見て直接家主に電話したりもしたが、外国人だということではなかなか斡旋してもらえなかった。3ヵ月見つからずどうしようかと思っていたところ、会社の日本人の同僚が保証人になってくれると言ってくれて、やっと現在のアパートが見つかった。家賃は1ヵ月5万3千円。

—日本で生活してみた感想を聞かせてください。
生活習慣が違うので最初は戸惑った。自分達の親世代は食事の時に箸を使っていた、日本ではもう使わないだろうと思っていたし、靴を脱いで生活することも知らなかった。ブラジルでは夜の10時くらいから家でパーティをするが、日本では近所に迷惑を掛けないように、10時には終わりにしなければならない。

人間関係も冷たく、日本人の友達が欲しいが受け入れてくれない。家族で来日しているから耐えられるが、1人だったらすぐに帰国したと思う。何でも買えて物質的には満たされるが、精神的にはあまり幸せとは思えない。妻が勤めているブラジル料理店では、母国のTV番組等のビデオの貸出もしており、交流の場となっている。結局ブラジル人で集まってしまう。

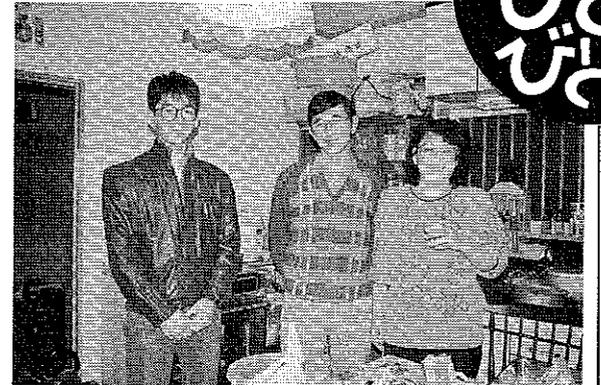
—将来の生活設計は。
来日前は1ヵ月4,000ドルくらい稼げると聞いていたがそれは幻想だった。その半分しか貰えないし、生活費が高いので、思い通りには貯金に回せない。現在兄が国の家を改築中だし、後3年働いたら帰るつもり。



工場労働は辛かったけど 今の仕事はとても好き ケーキの注文も殺到し 楽しい毎日、ずっと住みたい

三澤君恵さん

プロフィール：日系ブラジル人、クリチバ出身、46歳。夫51歳、子供3人（26歳、24歳、22歳）。1989年夫婦で来日（子供たちは1年後）。工場労働を経て、現在は人事管理、君江さんはセールス等の仕事に従事。



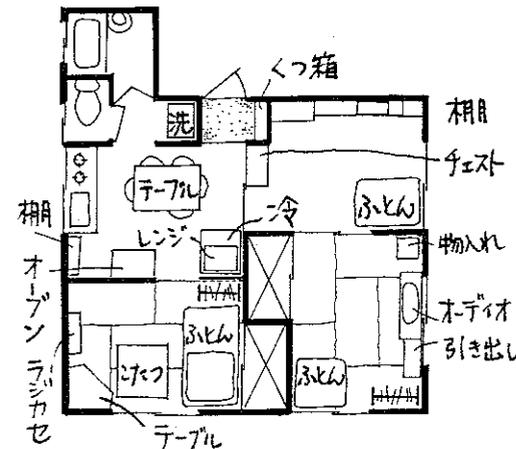
鉄骨造2階建アパートの1階、3DK（6畳+6畳+6畳+DK）、バス・トイレ付、家賃65,000円、大泉町

—来日の目的と日本での居住歴を聞かせてください。
ブラジルでは夫婦でファーストフードの店を営み、従業員を10人以上使っていた時期もある。でもブラジルはひどいインフレで大学を出てもサラリーマンの給料では生活できない。治安も悪い。ブラジルで日本の会社が雇用説明会を開いていたので参加し、家族のために日本で働こうと思い、3年前に夫婦で来日した。最初は足利市の鉄鋼会社で、2人ともプレスなどの肉体労働だった。月～土で残業は1日2時間位、1人月収20万円未満。住まいは会社が用意した古い一軒家で、トイレが汲み取り式だったのには本当にびっくりした。フロアはあったがシャワーはなし。間取りは6畳+4.5畳+DK+浴室、家賃は1人1万4千円。仕事がついのと、働いている人と話が合わなかったのとで辞めた。子供たち3人も来日することになり、もっといい仕事をとってブラジル人ネットワークで探してもらい、夫妻で太田市の電気部品の工場に入った。でも私はハンダづけの仕事で一日中ラインに立って腰を痛めて7ヵ月で辞めた。夫は1年勤めた。住まいは会社が用意したシャワー付きの新築ワンルームマンション。

大家さんはとてもいい人で、そこを引っ越した今でも交際が続いている。家賃は当初4万円、あとから安くなって1人1万4千円で、給与から天引きされた。

—現在の住まいと生活について教えてください。
その後仕事を変わり、夫は日系ブラジル・ペルー・パラグアイ人など工場働く人たちの労働管理をしている。自宅を毎朝6時に出て各地の工場で働く日系人を訪ねて1日200kmくらい動く。仕事の内容は病院、警察、なんでも相談所みたいなもの。私は化粧品セールスを週3日と、中学校の日本語学級の助手、家でのケーキづくりを仕事にしている。太田市に住んでいた頃から大泉町のブラジル人からのケーキの注文が多かったこともあり、大泉町で家族で住める家を探した。ある不動産屋で「貸家」と出ていたので尋ねると、「今物件はないから」という返事。私が「表に貸家と書いてあるのは何ですか」と聞くと、「あ、あなた漢字読めるの」と言われたこともある。外国人だから貸したくない。その後大泉日伯センターの知人が保証人になってくれて3DKのアパートを借りることができた。これが1年前から私たち夫婦と2人の息子の4人で住んでいる現在の住まい。家賃は6万5千円、敷金・礼金が2ヵ月ずつ。アパート居住者はほとんどが日系人。

—今後の日本での生活設計は。
工場で働いていた時はとてもきつかったけど今は自分の好きなことがやれているのでとても満足。今はクリスマス前だからケーキの注文が100個もあり大忙し。ケーキづくりのため大きなオープンも買った。この1年はとてもいい1年だった。日本は安全でインフレがないのでいい。私は日本が大好きでずっと住みたいと思っている。私たち夫婦はどちらも両親が日本人で、家では日本語半分、ポルトガル語半分の生活だったから、言葉の問題はない。今漢字の練習もしている。でも夫はずっと住みたいとは思っていないみたい。

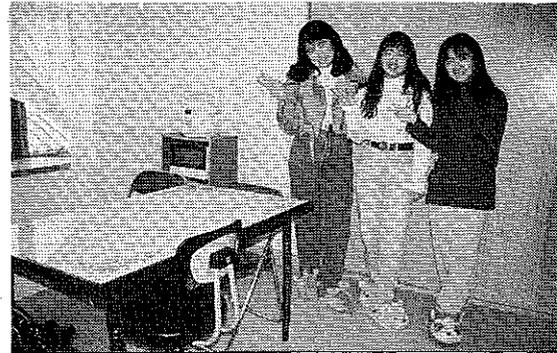


思いつきと好奇心で来日 暮らしにくいと聞いてたけれど みな親切で日本が大好き

クラウジア・セーリャ・ゴンサルベスさん
エリザンドラ・マリコ・タカミネさん
マリア・ヘジーナ・シマブクロさん

プロフィール：日系ブラジル人、サンパウロ出身。クラウジア（22歳）1991年9月、マリコ（18歳）1992年3月、マリア（23歳）1992年2月にそれぞれ来日。現在は大手食品メーカーA社に勤務している。

—来日の経緯と目的を聞かせてください。
母国では、クラウジアは秘書、マリアは小学校の教員をしていた。マリコは高校を卒業してすぐに来日した。「来日前に、日本の住宅はとても狭く暮らしにくいということと、外国人に対して差別があって人間関係が難しいという2つの情報があり、周りからは反対されたが、ブラジルにいるよりお金も稼げるし（クラウジア）」、「はっきりした目的はなかったがいとこが来日して仕事があると言われたので（マリコ）」、「ちょっとした思いつきと好奇心で（マリア）」とそれぞれの思いで来日した。3人とも最初からA社で働



鉄骨造2階建アパートの2階、3DK（6畳+6畳+4.5畳+DK）、バス・トイレ付、使用料1人15,000円、大泉町

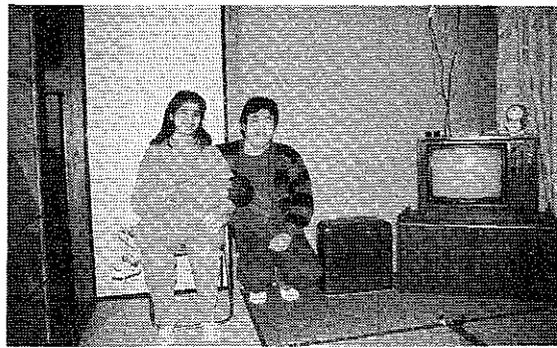
くことが決まっていた。
—日本の生活の感想と将来の生活設計は。
3人は日本の職場で知り合った。現在のアパートは6畳2間+4畳半+6畳のDKの間取りで、3間をそれぞれの個室として利用している。社宅は家賃が月額で決まっており、1人1ヵ月1万5千円を払っている。生活に必要なものはすべて会社で揃えてくれるし、来日前は不安もあったが、回りの人達も皆とても親切でとても日本が好きである。現状の生活は3人ともそれなりに満足しているが、家族や友人がブラジルにいるので、すぐではないが、帰りたいと思っている。

家族を呼びよせたけれど 妻は日本語が話せず 昼間は子供と2人きり

三浦セルジオさん

プロフィール：日系ブラジル人、サンパウロ出身、30歳。1992年7月に義姉と来日。A社の生産ラインで働いている。その後妻のカーチャさんと長男のエドワルド・ケンジくん（1歳7ヵ月）を呼び寄せた。

—来日の目的と日本での居住歴を聞かせてください。
母国に土地があるので、家を建てる資金を稼ぎたいと思い、以前A社で働いていた義母の紹介で書類を整えてもらって来日した。最初は一緒に来日した義兄弟2人と6畳2間+DKの社宅に入居した。家具等は付いていて、家賃は光熱費込みで1人1万4千円。約3ヵ月住んだが、家族を呼び寄せたかったので、会社に話して今の戸建（3DK）に引越した。家族3人だが、妻は働いていないので1人分の家賃でいいと言われた。
—日本の生活の感想と将来の生活設計は。
習慣の違いで最初はとても戸惑った。特に人との付き



木造平屋一戸建、3DK（6畳+4.5畳+4.5畳+DK）バス・トイレ付、使用料1人14,000円、大泉町

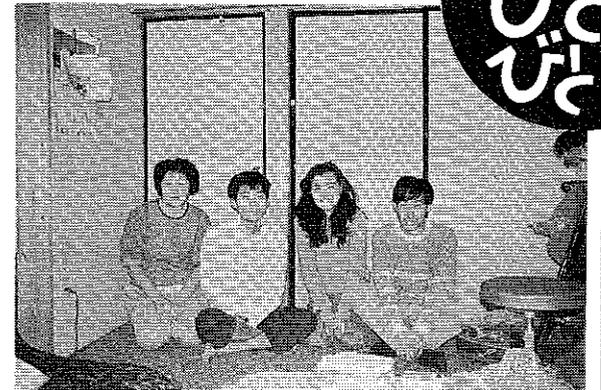
合い方。会社の忘年会に家族と一緒にいったら日本人に家族連れは誰もいなくてとても恥ずかしい思いをした。家の近所は日本人ばかりで、妻は日系ではなく日本語も全くできず近所付き合いはほとんどない。昼間は息子と2人きりで過ごし、お喋りが好きなのに淋しい思いをしている。家を建てる目標があるので、本当は家具等も買いたいのが我慢している。息子がもう少し大きくなったら、他の共稼ぎブラジル人夫婦のように子どもを保育所にあずけて、妻も一緒に働けたらと思っている。息子が学齢期に達する頃には貯金も溜まり帰国できると思うので、教育の心配はしていない。

最初に来たのは娘と私 次々に家族がやってきた 協議会の社宅なので 広い家に住み替えられた

新城和江さん(仮名)

プロフィール：日系ブラジル人、サンパウロ出身、53歳。1990年に長女（22歳）と来日。その後、夫、次男（17歳）、長男（23歳）が次々来日。夫は他県の会社に勤務し別居、他4人は協議会会員建設の社宅に住む。

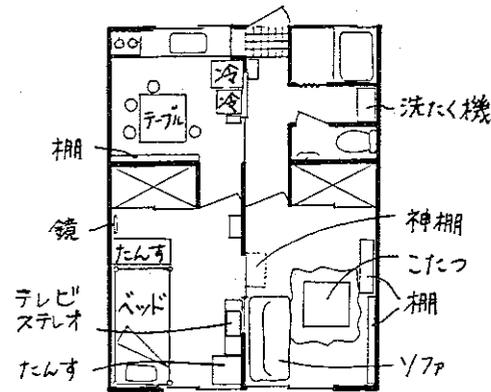
—日本での居住歴を聞かせてください。
最初に来日した私と長女は、当初は会社の用意したワンルームに住んでいた。家賃は1人1万5千円で、これは会社で決められている額だった。冷蔵庫、テレビ、こたつ、ふとん、鍋、電気炊飯器、茶碗コップ等の生活必需品は全て揃っていた。その後次男が来日したので、1991年1月に現在の2DKのアパートに移った。協議会の規約で狭い間取りに多人数同居させてはいけないことになっているということで、人数が増えた際の引っ越しはスムーズにいった。新しいアパートは、協議会会員の山口精機の社長さんが自分で建設したもので、山口さんが大家さん。家賃はやはり1人1万5千円。最初は3人で住んでいたが、長男が来日し今は4人。2DKに4人はちょっと狭いけど、当初は3人だったのだから仕方がない。ただ、私は土いじりが好きなので、できれば花を植えられる場所があるような家に住みたいと思っている。このアパートは全戸日系ブラジル人とその家族が入居している。
—日本での現在の生活と将来設計は。
今は、夫以外全員がエアコン部品をつくらしている会社



鉄骨造2階建アパートの2階、2DK（6畳+6畳+DK）バス・トイレ付、使用料1人15,000円、大泉町

で働いている。夫は、埼玉県にある建築の会社で甥や弟などと一緒に働いていて、週1回こちらに帰ってくる。私たちが働いている会社は、一時は社員280人中80人がブラジル人、20人がパキスタン人だったが、その後仕事が少なくなって外国人はブラジル人50人位に減ってしまった。1992年は8~12月まで土曜日が休みでひまだった。今はまた少し仕事が増えてきて、1日2時間位は残業がある。休みの日は、子供たちは家でビデオを見たり、友人と会ったりしている。長女は簡単な書替えて車の免許を取れたが、その後試験が必要になり、難しく長男はなかなか取れない。ブラジルよりも日本の方が生活しやすく、私は将来もずっと日本にいたいと考えているが、長男はブラジルの大学に戻りたいと、次男はブラジルでファッションデザイナーになりたいと思っている。やはりブラジルが住み慣れた場所だから。大泉町でサンバ祭をやった時の衣装は次男のデザイン。ブラジルの家はおじいさんが見てくれているので、帰っても住む家はある。ブラジルでは今仕事がなかなかないし、あっても給料が安い。

*山口武雄さん(大家、協議会会員山口精機社長)
協議会では、日系人を受け入れる社宅として自前でアパートを持つということ、私は2棟（24戸）アパートを建てた。そこには協議会会員の会社で働くブラジル人家族が入居している。協議会では1Kは1~2人まで、3人だったら2DKくらいの広さを目安にし、来てすぐ生活できるような生活必需品も揃えている。アパートでの暮らし方について特に注文はつけず、好きなように住んでいいし、棚などを壁にとりつけてもいい。ただ彼らは習慣の違いで畳の上でも靴で上がったりしたので、そういうことは注意した。協議会の会社で働いている日系人は全部で450名くらいで、彼らにはあまり問題はないが、大泉町の中ではほんの一握りの人たちだとも言える。



派遣会社の都合で 住まいを転々 他人との同居生活では 夫婦のプライバシーもない

水口ルベンス・イサオさん

プロフィール：日系ブラジル人、マトロウガタ出身、男性、41歳、既婚。妻セルマさんは21歳。1990年8月夫婦で来日。母国では体育理論の教師とスポーツ誌の記者、現在S社で冷蔵庫製造ラインの仕事をしている。

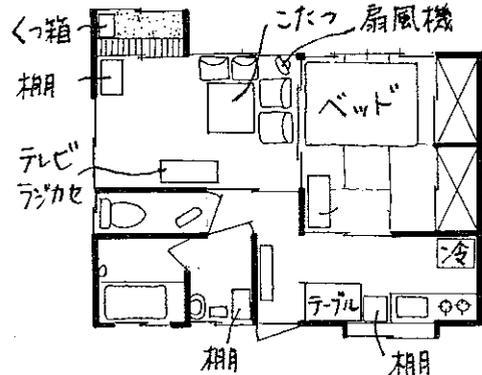
—日本に来てからの居住歴を聞かせてください。
人材派遣会社を通じてブラジルから大泉町へ来た。これまでに5回引っ越したが、4回目までは人材派遣会社の住宅に住んでいた。派遣会社の住宅の場合は、家賃ではなく住居費として、1人1万4千円（水光熱費込み、冷蔵庫・洗濯機付き、ふとんはレンタルで引っ越しの時は自分のふとんを持って移動）というシステムになっている。まず最初のアパートは6畳2間の2DKで、着いてみると実は私たち夫婦と他の日系ブラジル人男性2人との同居だった。同居は困るので会社に頼んで1週間でここは引っ越した。2回目の住まいは西大泉駅の近くのアパート、8畳2間の2DKだった。今度は私たち夫婦だけなので良かったのだが、部屋が広かったので派遣会社から他の家族を住ませるからと言われて4ヵ月で転居させられてしまった。住居費は1人1万4千円なので、派遣会社は一つの部屋に何人も住ませようとする。3回目の住まいは3DKの一軒家だった。ところが、ここも既に家族が一組住んでおり、彼らが2部屋使っているの、私たちは6畳一



木造平屋一戸建、2DK（6畳+6畳+DK）、1K・1K付、家賃51,000円、大泉町 友人夫婦と水口夫妻（左）

間しか与えられなかった。もちろん台所や風呂は共同で、プライバシーもなくつらい生活だった。4ヵ月後によく太田市にあるアパートに4回目の引っ越しをした。ここは全体で8戸のアパートで住宅の広さは6畳2間の2DK、ここに1年2ヵ月居たのだが、不景気になってきたため、派遣会社が住居費を1万7千円に値上げすると言う。しかも水光熱費やふとん等家具の使用料も別に払えと言ってきた。派遣会社の住まいだと、会社の都合でいつ転居させられるかわからず気持ちも落ちつかないし、夫婦の内一人が仕事を辞めると出なければいけない。住居費も値上げすると言われて、今度はもう自分で住まいを借りようと思った。

—現在の住まいと生活はどうか。
ここには1992年3月に越してきた。2DKの一軒家で家賃は5万1千円。「貸家あります」という貼り紙を見て、直接大家さんに電話した。大家さんにはブラジル人の知人が居たので日系人でも問題はなかった。保証人は友人の日系ブラジル人。狭いけど2人だけなので幸せ、もう出て行けと言われる心配もない。夫婦で働いているので月収は39万円（賞与無し）くらい。妻は日本語ができないので日本人との近隣付き合いはない。周囲に日本語のできる日系人がいるので、つい頼ってしまい言葉を覚えられない、それでも何とか。しかし医者に行った時には困った。専門的な医学用語がわからないので症状をきちんと伝えられず、妻の身体の具合はまだよくなる。ブラジルでは、友人たちとバーベキューをしたりして夜遅くまで楽しく騒げるのだが、日本ではうるさいと言われてできないのが淋しい。恋人同志、町で肩を組んだりキスすることも出来ない。でも来日したブラジル人はこのまま日本に住み続けたいと思っているだろう。なによりも経済が安定しているので。しかし私たちは両親や兄弟をブラジルに残しているの、いずれは帰ろうと思っている。



報告

日本の社会制度と外国人

外国人の子供たちにも 日本の公立学校は 開かれているか

日本で生活する外国人の数は年々増加の一途を辿り、現在オーバーステイも含めれば、150万人以上の外国人がいると考えて間違いのないだろう。来日する外国人の国籍や来日目的が多様化する中で、家族を伴って来日する人や、日本で結婚し家族を形成する人も次第に増えてきた。これまで外国人子女のための教育施設といえば、英・米・仏・独などがざられた欧米諸国の母国語学校と在日韓国・朝鮮人や中国人のための民族学校などの私立学校と考えられてきた。しかし、近年では英語圏の子供たち以外に、アジアや南米各地から来た子供たちも増加し、公立の小・中学校への入学希望者も増え、教育の現場では新たな対応が迫られている。平成2年12月末で、義務教育の就学年齢に相当(5~14歳)する外国人登録者数は、永住者等を含めて約11万人、また小・中学校における外国籍の児童・生徒数は、小学校で約4万7千人、中学校で約2万5千人(昭35.1現在)となっている。

外国人子女と義務教育

現在日本に在留する外国人の子供たちは、義務教育諸学校(小・中学校)への就学の義務はない。しかし、日本の学校教育を受けることを希望する人に対しては、国籍や日本語能力に関わりなく、公立の小・中学校での受け入れを認めており、授業料不徴収や教科書無償供与なども日本人と同様の扱いになっている。また文部省では平成4年度以降の公立小・中学校への入学希望する就学予定年齢に相当する人に対して、入学案内を行うよう都道府県教育委員会に指導している。幼稚園、保育園についても、日本人と同様に認められている。しかし現実には、各教育委員会による就学案内が徹底していないため義務教育就学の手続きを知らない外国人が多く、また中学校の就学案内は小学校6年在籍者を対象としているため、在籍していないと案内が届かないなど、そもそも就学のための情報提供が適切になされていない。

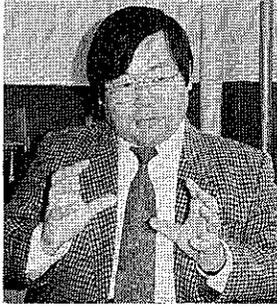
外国人児童・生徒への日本語教育

文部省は外国人子女の公立学校受け入れを認めているが、これは受け入れ体制が整っているという意味ではない。近年日系人の急増などから、保育園や公立小・中学校に日本語のわからない児童・生徒が入学してくるという事態が各地で発生している。そこで平成3年に全国の

公立小・中学校を対象に文部省が実施した調査(*1)によると、外国人児童・生徒で日本語教育が必要な者の人数は、小学校3,978人(1,437校)、中学校1,486人(536校)であった。東京都、神奈川県、大阪府といった大都市と並んで愛知県や静岡県でも500~600人が在籍している。しかし実際の学習指導状況を見てみると「特別な配慮は行っていない」という回答が小・中学校合わせて529校と全体の1/4を占めていた。外国人児童の母国語は多い順に①ポルトガル語(35%)②中国語(30%)③スペイン語(11%)となっており、英語以外の言語が97%と現場での対応の困難さが伺える。一方、何らかの学習指導を行っている場合の指導方法としては「授業中に教員が説明(54%)」したり、「一部教科(特に国語)を取り出して日本語指導を行う(28%)」ケースが多い(複数回答)。また指導の目安となる教師用指導の手引きについては「適切な手引書がない」とする学校が8割に達しており、各学校が独自の方法で試行錯誤しながら取り組んでいる現状が推察できる。これらの現状に対して、文部省では外国人の児童・生徒が学校生活を送る上で必要な日常会話教材『日本語を学ぼう』(昭4.8)を作成、今年度は引き続き日本語教材の作成について取り組み始めた。また、平成4年度から、日本語指導協力者(母国語の話せる人)の巡回指導による支援体制や外国人児童・生徒のための教員増員に必要な費用を予算化し、さらに全国で13校を外国人児童・生徒の指導ノウハウ研究のための研究協力校に指定し調査研究を進めていこうとしているが、現状では外国人子女の教育に対する日本政府の対応は、ようやく緒についたばかりと言えるだろう。

ところで、日本で生活する外国人の中には当然オーバーステイも存在するのだが、その子供たちの場合はどうなるのだろうか。文部省の見解によると、仮にオーバーステイであっても本人が希望すれば学校は受け入れるという話であった。しかし就学に際しては、まず市町村の教育委員会へ届け出が必要である。ところが、この時外国人登録証が必要となる。教育委員会は公務員として入管への通報義務があるため、親はそれを恐れて実態としては学校へいけない子供たちが存在する。このような日本政府の対応は、子供の教育を受ける権利を奪うばかりでなく、将来未就学児童の増加をもたらす、結果的には自ら社会的問題を生み出す余地を残すことにもなりかねないとは言えないだろう。

*1「日本語教育が必要な外国人児童・生徒の受入れ・指導状況について」平成4年4月 文部省 参考文献/「外国人の就労に関する実態調査結果報告書」平成4年1月、総務庁行政監察局



“住み分け”こそ 外国人と共生していく知恵

喜多川豊宇さん(東洋大学社会学部助教授)に聞く

日系ブラジル人の日本への出稼ぎの実態を主な研究テーマに、日本のみならず送り出し国ブラジルでも生活実態と意識調査を行っている。外国人労働者の問題は、日本人を知ることであり、ボーダレス時代の世界を考えるうえでも重要という。

*外国人が居住しやすい地方都市の条件

日系ブラジル人労働者が多く居住している群馬県太田市・大泉町、静岡県浜松市などは、外から来る人を受け入れる土壌が昔からあった地方都市なんです。大泉町には戦前、中島飛行機があって、日本各地から、朝鮮半島からも労働者がやってきているんです。浜松は東海道の中間点で、上方と江戸の文化が行き交うところで、移動する人を労働力として吸収しながら発展してきた街です。こういう街では外から来た人と上手につきあう知恵を住民が身につけているんですね。ですから外国人が多くなっても、住民との間にそれほど大きな摩擦が起きていないんです。例えば大泉町だと日系ブラジル人が全人口の6%、その他の外国人を入れると1割に達しているのに、住民の拒否反応は少ない。その知恵というのは、ひとつは雇用者が日本人との摩擦、外国人同士の摩擦を起ささないようにするために、同国人を一棟に集めて“住み分け”をしていることなんです。もうひとつは、雇用者が外国人の生活の責任を負っているということです。彼らがどこで働いているのかどこに住んでいるのかわかっていれば、地域住民は安心ですし、新たな住民として受入れてもらえやすいわけです。住民も外国人とは“適度にかかわる”というスタンスで接しているんです。“住み分け”は日本だけの特殊な現象ではなく、世界的にみても、外国人を受入れている国では同国人が集住するのは基本原則なんです。ドイツやフランスでもトルコ人やイラン人は同国人同士で集住しています。政治・経済はボーダレスになっても、逆にその国固有の言語・宗教・習慣などはますます大事になっているんです。ですから“文化が違うのは当たり前”という前提に立って外国人の居住問題を捉えていかないとうまくいかないのではないかと思います。

*外国人が居住できる生活基盤が整っているか

外国人居住で問題なのは“文化の違い”よりも、外国人にとってこの国の生活基盤が整っているかどうかです。太田市・大泉町・浜松市の3つの街で生活調査し

たなかから、生活者として外国人が暮らしていくためのシステムが日本ではまだまだ不十分だということが出てきたんです。具体的には日本語教育と職業訓練が受けられるシステムが公にないこと、母国語で通じる医療・福祉の相談システムがないこと、母国語で通じる職業・住居の斡旋をしてもらえないこと、そして子供の教育への不安などです。昨年実施した浜松市の調査ではバブル崩壊後も外国人雇用は全体的に拡大・多様化していて、不可欠の労働力になっているんです。正社員として雇用する企業も増えてきていますし、今後は長期化・定住化する傾向になってくることが予想されるので、生活基盤を整えていくことは、ますます必要になってきます。経済の動きがその国だけで完結できなくなっている現代では、国はひとつの都市であり、居住と職業の選択の自由がある限り、地球規模で労働力が移動していくのは避けられないことなんです。しかも高齢化社会に入る日本のこれからを考えれば、鎖国だ開国だという以前に、労働力不足を補うのに彼らなしではやっていけない状況なんです。さらに日系ブラジル人を送り出す側もほぼ限度にきていて、長期化・定住化を望んでリピーターといわれる再度、再々度来日する人や2世・3世が多くなっているんです。2世・3世になると日本語は話せないし、混血の人も多く、とうてい日本人には見えないし、メンタリティーも違う。近い将来、いろいろな国の人が日本に生活することになるはずで、そうした時、日系ブラジル人は、外国人が日本で生活するためのシステム作りには、大変いいモデルになると思います。

編集・発行：まち居住研究会（ジオ・プランニング内）

〒102 東京都千代田区飯田橋 4-5-4-201

Tel 03-3238-0574 FAX 03-3238-7878

スタッフ：稲葉佳子(ワン)・塩路安紀子(ワン)

松井晴子(エイト)・小菅寿美子(観)

次号予告：住宅時事往來5号（7月発行予定）

「外国人の住宅事例」 頒価 200円（送料実費）